令和元年度　第３回明石市総合教育会議（議事要旨）

日　時	2020年(令和２年)２月５日（水）16:00～17:30
場　所	明石市役所議会棟　大会議室
出席者	泉房穂市長、清重隆信教育長、伊賀文計教育委員、栗岡誠司教育委員、 川本まり子教育委員、柏木輝恵教育委員 奥田正樹教育推進委員、久保美和教育推進委員、村岡有紀教育推進委員、 小山順子教育推進委員、金谷四郎教育推進委員
協議・調整事項	(1) 多様な学習活動に向けた取組について (2) インクルーシブ教育について (3) 学校と地域との関わりについて (4) 学校におけるLGBT/SOGIの取組について (5) その他
配付資料	・ 次第 ・ 資料１ 多様な学習活動に向けた取組について ・ 別紙資料１ フリースクール等一覧、兵庫県立高校の入試要項抜粋 ・ 資料２ インクルーシブ教育について ・ 別紙資料２ 小中学校における具体的支援例（H29.H30合理的配慮実践事例集より） ・ 資料３ 学校と地域との関わりについて ・ 資料４ 学校におけるLGBT/SOGIの取組について ・ 別紙資料４ LGBT/SOGIに関する先進的取組事例について ・ 新年度予算案の基本的な考え方（1/27新年度予算編成状況説明会資料） ・ 広報あかし2020年（令和２年）２月１日号
事務局	政策局政策室 （その他出席者） 教育委員会事務局

１　開　会

（市長）

・ これから先を考えたまちづくりにあたっては、教育は重要である。縦・横の連携を図るために、本日の総合教育会議で情報共有・意識合わせをしていきたい。

２　議　事

(1) 多様な学習活動に向けた取組について

・ 教育長から、資料１に基づき、多様な学習活動に向けた取組について説明の後、意見交換。

（市長）

・ こどもの成長過程で学校は重要な場であるが、様々な事情も踏まえて、学びの環境は多様であるべきという問題意識を市長になる前から感じていた。

・ 以前は「登校拒否」というマイナスイメージの表現が世間で使われていたが、社会の認識の変化とともに「不登校」という表現に変わってきた。不登校の生徒に対する支援目的については、学校復帰のみを前提としたものではなく、生徒の気持ち、事情に合わせた支援を行う方向に変わってきている。
・ 多様な学びを確保する中で、IT技術の活用のほか、進路の際の評定について運用改善を図ることが必要と考えている。

（教育委員）
・ 環境を変えることで登校できるケースもある。ゴールとしては、卒業後に一社会人として自立できるようになること。学校はその途中経過であるので、多様な学びの形があるのが望ましい。

（教育推進委員）
・ 不登校の生徒にとって、学校に戻るチャンスがあること、進学の際に不利とならないこと、社会とのつながりが確保されていることが必要である。また、保護者や地域の方の不登校に関する理解も重要である。

（教育長）
・ 中学校に進学すると、授業スタイルが学級担任制から教科担当制に変わる。ただ兵庫県では小学校高学年において、一部教科担当制を導入し始めており、国でも議論されている。また、卒業後を想定した指導の中で規律性を求める傾向がある。それらを含めた複合的要因と、環境が大きく変わることで不登校となる生徒が増えると考えられる。
・ 小中連携を図り、いわゆる中一ギャップを緩和する取組が必要となる。

（教育委員会事務局）
・ 複合的要因に加え、環境が大きく変わることが影響していると考えられる。
・ テストにおいては、小学校では単元ごとの実施だったものが、中学校では中間テストや期末テストとなることで試験範囲も広くなってくる。
・ 小学校では学級担任制であり、こどもとの距離が近い。

（教育長）
・ 中学一年生で不登校の数が急増する。
・ 不登校のこどもに対しては、学校が継続的に見守りを行うようにしている。生徒の欠席日数に応じて、家庭への電話連絡や家庭訪問を行うほか、欠席が長期に渡る場合は、学校で作成した欠席連絡シートを市教委に送付し、当該生徒に対し、早期にきめ細やかな対応ができる体制を取っている。

（市長）

・　中一ギャップの緩和に向けては、小中連携の活発化は一つの方向性として考えられる。
・　こどもの継続的な支援については、新たに導入予定のシステムを用いながら、生徒個人ごとの情報を教員間で共有を図っていくことが必要と考えている。
・　フリースクールについては、各種NPOとも連携していきながら多様な学び方の確保を検討していきたい。

(2) インクルーシブ教育について

・　教育長から、資料２に基づき、インクルーシブ教育について説明の後、意見交換。

（教育委員）

・ インクルーシブ教育は障害のあるこどもだけでなく、障害のない子どもにとっても重要なテーマである。
・ エレベーターの設置が計画的に進められているが、そういったハード面だけでなく、車いすのこどものクラスを１階にするなど、ソフト面や配慮の範囲で対応できることは十分にある。
・ 担任が特別な配慮を要する生徒に付き添っているときは、他の先生が他の生徒を見るなど、安全面での配慮が必要となる。

（市長）

・ このテーマについての支援方法としては、通学が困難な生徒に対して、自宅で学べるようにするなど多様な学びの場を確保すること、出来る限りみんなと一緒に学校生活を送るという観点があるものの、環境の整った学校で学ぶ利点がある特別支援学校、同じ学校で学ぶがクラスが違う特別支援学級、必要な配慮を行いながら同じクラスで学ぶ方法がある。
・ 明石では他市と比べて、特別支援学校よりも特別支援学級に通っていたり、特別支援学級よりもなるべく同じクラスで学んでいるような傾向があると認識している。

（教育長）

・ 明石では支援が必要なこどもについても、なるべくみんなと同じ環境で学んでもらうよう取り組んでいる。また、特別支援学級に通っていても、授業や行事によっては通常学級の生徒と一緒に活動するようにしている。

（教育委員）

・ インクルーシブ教育の啓発や教員への指導は重要だが、先生だけでの対応には限界がある。精神科医師や臨床心理士などの専門職を含め、チームで対応することが必要と考えている。

（教育長）

・ 介助員、特別支援教育指導員など人手の問題がある。

・ また、特別支援教育巡回指導員については、先生の気づきなどを基に相談を受け、専門性を活かしたアドバイスにより、その後の支援に役立てている。明石では年間50回以上学校へ派遣しており、ニーズもあるため予算面も含め充実化を図っていきたい。

（市長）

・ 明石市が中核市に移行したことで教職員への研修を行うことが可能となった。その研修を活かして、先生の早期の気づきを促していきたい。

(3) 学校と地域との関わりについて

・ 教育長から、資料３に基づき、学校と地域との関わりについて説明の後、意見交換。

（市長）

・ コミュニティスクールについては、広報あかし２月１日号でも取組を市民に広く周知している。

（教育委員）

・ コミュニティスクールの取組を市内全小中学校に広げるにあたっては、先生やまちづくり協議会だけでは限界があるため、コーディネーターの充実化が重要となる。現在も、松が丘地区は、学校教育課に配置されているコーディネーターが地域と学校をつないでくれている。

（市長）

・ 松が丘地区はまち協を含め、地域と学校がいい関係を築き、これまでも取り組んできた。今後、他地区にも取組を進める上でも、コーディネーターの役割は大きいと認識している。
・ 小中一貫校のテーマについては、市の次年度予算案にも計上している。高丘小中学校において、より柔軟に一歩進んだ連携を図っていきたいと思っている。

（教育委員）

・ 今回の高丘での取組が他の小中学校の先駆けとなるモデル的取組となってほしい。大体は過疎対策として実施している自治体が多いが、明石はそうではない。マイナスイメージからのスタートではなく、積極的な施策として実施を期待している。

（市長）

・ 高丘地区から近い明石北高校の理数学科と連携していくことは可能か。

（教育委員）

・ 明石北高校は文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールに認定されている。そのスーパーサイエンスハイスクールは高校生の育成だけでなく、頂点に立つようなこどもを

育てるため、すそ野を広げることも目的に含まれている。また、高校だけで完結せず、地域へ還していく枠組みもあり、高校生が地域の小中学生を教えるほか、小中学校の先生が高校の学習内容について学ぶという取組も考えられる。

（教育推進委員）

・ 学校と地域が連携を図り、ひきこもりのこどもや学校の勉強についていけていないこどもが学べる場を設けてほしい。特に、ひきこもりのこどもが学校に復帰しようと思っても、勉強の遅れがネックとなる場合がある。

（市長）

・ まず、こどもの居場所づくりとして、地域イベントやこども食堂における交流などを通して居場所の確保を図っていきたい。次に、学習支援については、教育委員会事務局の方から、現在の取組状況と今後の取組について説明をお願いしたい。

（教育委員会事務局）

・ 現在、市教育委員会では学習面でつまずきやすい小学校３年生を対象に、「わくわく地域未来塾」を地域の力を借りながら実施している。これまでは２学期から実施していたが、今後は時期を早めて、夏休みから実施していきたいと考えている。いわゆる「３年生の壁」をこどもたちが乗り越えられるよう支援していきたい。

(4) 学校におけるLGBT/SOGIの取組について

・ 教育長から、資料４に基づき、学校における LGBT/SOGI の取組について説明の後、意見交換。

（市長）

・ 現在、LGBT担当としての職員採用を実施しているところである。幅広い分野にまたがるテーマで、教育分野にとっても重要となる。

（教育推進委員）

・ 学校の受入環境を整えることは重要であるが、生徒自身が性を自覚する機会や周りの理解を深めることも重要となる。性について迷っていることを意味する「Q」については二次性徴期に始まるとされており、他市の授業で取り上げた際には安心した表情をするこどもも見受けられ、先生方など周囲の理解も深まった。明石市の現在の取組や今後の予定についてお聞きしたい。

（教育長）

・ LGBT/SOGIを取り上げている授業はまだあまりできていない。理由の一つは、先生の理解が不十分である点がある。研修等を実施しているが、まだ全ての教員の理解には至ってい

ないことは課題と感じている。指導方法についても、教材などが不足しているため、ゲストティーチャーの活用なども検討していきたい。

（市長）

・ 市が採用するLGBT担当職員が、学校と連携して取り組んでいくことは考えられる。

（教育委員）

・ そもそも、上下の制服の必要性から見直してもいいのではないか。海外では男女統一のトレーナーだけがあるような地域もある。また、現状では中学生という性自認における過渡期において、制服の種類を入学時に判断しなければならない。

（教育委員）

・ 不登校のテーマにも共通するが、選択肢が増えることが重要と考えている。また、こどもの成長により、制服の買い替えによる経済負担もある。

（教育推進委員）

・ 現状では、女子がスラックスを選ぶことは特異性があり、勇気がいること。そうではなく、こどもが制服について好きなものを選べる状況にすることが必要となる。ただ、完全に私服にすると、貧困などの事情によりいじめにつながる可能性もある。制服は残しつつ、私服も容認してもいいのではないか。

（市長）

・ 個人としての意見では、制服も私服も選択できる多様な選択肢を用意することには賛成である。様々な論点はあるが、まずはこどもたちがこのテーマについて、主体的に話をすることが必要であると理解している。
・ 価値判断が分かれるテーマであり、検討を進めながら、市としてはできることをひとつずつ増やしていきたい。
・ LGBT/SOGIは全ての人に該当するテーマであり、少数者を対象としたテーマとしてではなく、全市民対象の施策として進めていきたい。

(5) その他

（教育推進委員）

・ 不登校のテーマについて、市が拡充した取組を進めることに対し感謝したい。

（教育委員）

・ コミセン高齢者大学での学びをこどもたちへアウトプットしていく視点が少なく感じている。コミュニティスクール・コミセン高齢者大学間の双方向での人材活用や取組も進めてほしい。

（市長）

・　連携した取組を進めている部分もあるが、学童保育のテーマなどでも検討していきたい。

（教育推進委員）

・　重要なコミュニケーションツールである手話について、こどもが持続的に学べる機会を設けてほしい。
・　こどもの居場所としてのこども食堂について、支援の充実化を図ってほしい。
・　こどもの段階から、AEDの使用などの救急救命に関する知識の習得に力を入れてほしい。

（市長）

・　手話教育については、現在小学４年生のタイミングで実施している。また、手話カフェを実施しているこども食堂がある。今後もこどもが手話に関わる機会を増やしていきたい。
・　こども食堂については、市内43か所が助成を受けて実施している。引き続き、支援策について検討を続けていきたい。

（教育長）

・　救急救命については、消防局と連携して一部の学校で実施している。小学生のうちから授業になるべく取り入れていきたい。

（教育委員）

・　多様な学びのテーマについて、明石市内にフリースクールがないことは残念に感じている。市内でフリースクールを設立しやすくなるよう、こども食堂のような支援を実施してほしい。

（市長）

・　市内でフリースクールを実施したいとの声は聞いている。これからではあるが、検討していきたい。

（教育委員）

・　高丘の小中一貫校の取組について、ぜひ全市に広げていってほしい。

（教育推進委員）

・　最近若い先生が多いと感じている。先生に対する教育も重要であるが、本来の業務で忙しく十分な時間が取れていないのではないか。質の高い研修を実施し、先生の質の確保を図ってほしい。

３　閉　会

以上